

---

# 奇妙な同居

クラッキー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奇妙な同居

### 【Nコード】

N4494Z

### 【作者名】

クラッキー

### 【あらすじ】

朝、目覚めると、見たことがない天井が、視界に入ってきた。  
ここはどこだ？

強引で自己中心的な女性に振り回される男。高校時代の同級生の男  
女が繰り広げる奇妙な同居生活。

男は誘惑に耐え、平穏な日常を取り戻すことが出来るだろうか？

やってしまった…のか？ (前書き)

久しぶりの投稿です。

相変わらず、拙い文章ですが、暖かく見守って下さい。

やってしまった…のか？

朝、目覚めると、見たことがない天井が、視界に入ってきた。

ここはどこだ？

まず、自分の置かれている状況から把握しなければならない。

現在、寝ている場所は、フローリングの床に敷かれたカーペットの上。

毛布は掛かっているが、布団の上ではない。

この部屋は、殺風景だが綺麗に片付いている。

俺の部屋は、こんなに片付いていない。

ここは、俺の家ではないことを理解した。

そして、横に目をやると、昨日、俺が着ていたはずのスーツが、ハンガーに吊されている。

ということは、今、俺が身に付けているのは、Yシャツの下に着ていたTシャツとパンツのみ。

反対側に目をやると、ベッドがある。

一人用よりも、少し大きめのベッドである。

そのベッドには、この部屋の住人らしき人物が、頭まで布団を被って寝ている。

コイツは誰だ？

何となく、今、置かれている状況を理解し始めた時、目覚まし時計が鳴り響いた。

声を上げそうになるのを何とか堪え、ベッドの上の方に目をやると、布団の中から伸びた手が、目覚まし時計を止めようと、虚しく空をさまよっていた。

その手が何度か空を斬った後、布団の中から頭が出て来る。

そして、布団の中の住人は、目覚まし時計を止めると、再び、布団に潜り込んだ。

って、オイ！

また寝るんかい！

布団に潜り込んでいる、この部屋の住人らしき人物は、女性だと思われる。

布団から伸びていた手は細く、爪には剥がれかけのマニキュアが塗ってあった。

寝癖で顔までは確認出来なかったが、髪は長く、茶色かった。

俺は、コイツを知っている。

知らない奴の家で寝ていたら、それはそれで大問題なので少しホッとした。

そして、状況を整理する為に、昨日からの行動を一から振り替えることから始めなければならない。

俺の記憶が確かなら、今日は日曜日で、昨日は土曜日。

今日は休みだが、昨日は土曜日にもかかわらず仕事だった。

本来、土曜日は休みなのだが、休日出勤ってやつだ。

仕事を終え、出先から直帰したはずだ。

そして、重い足を引き摺りながら駅に着くと、駅のホームのベンチに、一人でポツンと座っている女性を見掛けた。

「ねえ、彼女！今、一人？暇ならどっか遊びに行かない？」

こんな風に女性に声を掛けることが出来るなら、彼女いない歴は年齢と一緒にあるはずがない。

例えそんな芸当が出来る人間だとしても、この時はそんな気力もない。

俺は、綺麗な格好をしているその女性が気になってはいたが、チラチラと遠巻きに見ているだけだった。

その女性の様子は、明らかに落ち込んでおり、ハンカチを握りしめている。

その視線は、一点を見つめたまま、焦点が定まっていないうろた。

『ピンポン！間もなく電車が参ります！』

駅のアナウンスが流れた時、その女性がこっちを見た。

チラ見をしていた俺の視線と、見事に合ってしまう。

慌てて反らしたが、彼女には気付かれてしまったようだ。

すぐに彼女は、コツコツとヒールを鳴らしながら、近づいて来る。

やべえ、文句を言われるかも…。

案の定、そのヒール音は俺の横で止まった。

「なに見てんのよ！」

とは言われなかった。

しかし、彼女の視線は間違いなく俺を睨んでいる…、と思われた…。

「カワグチタク？」

「えっ！」

不意に俺の名前を呼ばれ、振り返る。

「やっぱりそうだ！タクちゃんじゃん！久し振り！」

久し振り！と言われても誰だか思い出せない。

「えーと…、誰だっけ？」

「はあ？覚えてないの？『親友』の顔を忘れるなんていい度胸だな、オイ！」

そう言われると同時に、脛を蹴られた。

「いてえー！もしかして、石崎香織か？」



懐かしい痛みと共に、名前を思いだす。

高校時代、よくこうやって脛を蹴られていた。

男っぽい口調の上に、口より先に足が出る奴は石崎しか知らない。

しかし、俺は彼女と親友になった覚えはない。

どちらかと言えば、苦手な部類だ。

ましてや恋愛感情なんて、とてもとても…。

「タクちゃん、仕事だったの？もう終わり？」

一応、俺の名前は川口卓<sup>カワグチスグル</sup>である。

ただし、周りにスグルと呼ぶ奴は誰もいない。

友人だけでなく、会社の同僚、後輩も、『タク』、『タクちゃん』、『タクさん』と呼ぶ。

家族までもがそう呼ぶ。

高校時代、俺のことを『タク』と呼ぶ女子は、石崎だけだった。

そう考えると、彼女も友人の一人だったとは言えるかも知れない。

「家に帰るところだけど？」

「ちょうど良かった！ちょっと付き合いなさいよ。どうせ、暇なん

でしょ？」

そう言い終わる前に、俺は袖口を掴まれ、俺を引き摺るように、石崎香織は改札に向かって歩き出していた。

確かに暇ではあるが、俺に選択権というものはないのだろうか？

駅前の居酒屋に入り、高校時代の思い出話を肴に酒を飲む。

恋愛関係の話もした。

俺は、見栄をはってみたが彼女には通用しなかったようだ。

表立って指摘はされなかったが、彼女いない歴と年齢が一緒であることを、気付かれたと思われる。

石崎にも、そういう類いの話を突っ込んでみたかったが、何か得体の知れない物に止められた気がする。

酒はしこたま飲んだ。

飲んだと言うより、飲まされた。

無理やりではないが、石崎のペースに合わせたら、いつも以上に飲んでしまった。

石崎は酒が強い。

フラフラになりながら店を出た俺と違い、アイツの足取りは、かなりしっかりしていた…記憶がある。

終電には間に合わず、タクシーで帰る。

二人で一緒のタクシーに乗ったはず。

乗ったところまでは覚えている。

乗って…どうしたんだっけ、俺？

そのまま、石崎の家に押し掛けてしまったのか？

もしかして、やってしまった…のか？

俺の混乱に拍車が掛かった時、もう一度、目覚まし時計が鳴った。

今度は、彼女の枕元ではなく、別の場所で鳴っている。

すると、布団の擦れる音がした後、タンツと床に足をつける音がした。

今度は起きるようだ。

足音がした方を見ると、女性らしい白くて細い足が、一歩踏み出そうとしていた。

ちよ、ちよっと待て！

そのまま行ったら…！

「グエー！」

「キャー！」

ドタン！

男のうめき声と女の悲鳴、誰かが床に倒れ込む音が部屋に響いた。

**俺は誰でしょうか？（前書き）**

初日は二話同時に投稿します。  
今後の更新は不定期です。

俺は誰でしようか？

「グエー、ゲホッ、ゴホッ、ゲホッ！」

見事に腹を踏まれ、悶絶する。

「痛いなー、もー！何でこんな所で寝てんのよ！」

それは、こっちが聞きたいんだが…。

彼女は、床に打ち付けた肘やら膝やらを擦っている。

「人を責める前に、謝罪の言葉はないのか？」

どんな騷けをされてきたんだ、コイツは！

「元はと言えば、アンタがいけないんでしょ！」

それは、ごもつともですが…。

「ところで…、いくつか質問があるのですが…、よろしいでしょうか？」

ひとしきり悶絶した後、ようやく起き上がり、いくつかの疑問点を確認する作業を始める。

自分自身の混乱を収めるには、目の前の人物の記憶に頼るしかない。

「回りくどい言い方してないで、さっさと言いなさいよ！だから、モテないのよ！」

「大きなお世話だ！」

という言葉はグツと飲み込む。

「お前、県立A高等学校卒の、石崎香織だよな？」

「そうだよ。」

やっぱり、昨日、俺は石崎に再会した。

高校卒業以来だから、10年ぶりだろうか。

「俺は誰でしようか？」

「誰って、タクちゃんでしょ？県立A高等学校卒で、彼女いない歴が年齢と一緒にカワグチタク。」

コラコラ、勝手に大袈裟な呼称を付け足すな。

それに、『タク』ではなく、『スグル』である。

コイツも、俺のことをちゃんと知っている。

「ここはお前の家だよな？」

「そうだけど…、何なの、さっきから！記憶喪失の振りでもしてるの？そんなことしても、昨日、アンタが犯した過ちは許さないよ！」  
過ちとは一体…。

「俺、昨日…、何かした？」

「はぁー？覚えてないの？アンタって最低！それ相応の責任はとってもらうからね！」

俺はやはり…。

何ということでしょう。

肝心な部分を何も覚えていません。

「俺の方が責任とって…ブツブツ…。」

「ブツブツ言っていないで、言いたいことがあるなら、はっきり言い！言い訳ぐらいは聞いてやるよ！許すかどうかは別問題だけど。」

断片的ではあるが、記憶が繋がると、冷静になってきた。

そして、目の前に広がる絶景…、もとい、光景に目を奪われる。

目の前には、寝巻き用と思われるTシャツとホットパンツを着た若い女性。

Tシャツの上からでも、二つの大きめな膨らみが確認出来る。



ちょっと刺激が強すぎる。

そして、そのまま視線を下に動かしていくと、現わになった細く白い太ももが…

「ぐわっ！」

「なに見てんのよ！」

口より先に、彼女のそばにあったクッションが飛んで来た。

口より先に手が出るのは、悪い癖だと思うよ…。

取り敢えず、これから俺がとるべき行動を整理する為に、洗面所に逃げ込む。

だがしかし、整理しようにも、二日酔いで頭がガンガンして、全く整理出来ない。

浮かんで来るのは、先程の寝巻き姿の石崎ばかり…。

この時、俺が冷静ならば、あるいは、恋愛経験が豊富ならば、洗面所にあった、使い古された赤色と真新しい青色の二つの歯ブラシの

違和感に、気付いていただろう。

しかし、俺が気付いたのは、独り暮らしの女性にしては、石崎はい所に住んでいるということだけだった。

俺が洗面所から出て来ると。

「コーヒーと紅茶どっち？」

「じゃあ、コーヒーで。それから、冷たい水を一杯。」

「かしこまりました。お会計は一万円でございます。」

さすがに、ぼったくり過ぎである。

ここは、座っただけで、福沢諭吉が一枚なくなるぼったくりバーですか？

「ここって、最寄り駅はどこ？」

「T駅。ここから歩いて十分ぐらい。」

オイオイ、都会じゃないか。

しかも、駅前。

俺の最寄り駅とは二駅しか離れていないが、駅の規模は雲泥の差だ。

独り暮らしの女性が、そんない所に住めるものなのか？

俺だって、男一人で生きていけるぐらい稼いでいる。

しかし、学生時代のボロアパートこそ抜け出しはしたものの、とてもじゃないがこんな場所には住めない。

見たところ、部屋の広さは、俺の部屋の倍はあるぞ。

しかも、窓からの見える景色は、明らかに高層地帯から見えるものだ。

「お前、結構、稼いでいるんだな…。」

「まあね…。結構、割りがいい仕事だからね…。」

「仕事、何やってるの？」

「…、キャバクラ…。」

「はあー？」

「私が何してようが、タクちゃんには関係ないでしょ！」

「別に咎めてないよ。ただ、ちょっと意外だっただけで…。」

だから、酒が強いのか？

だから、こんなにいい所に住めるのか？

「別に体を売ってるわけじゃないし…、こう見えても人気あるんだから…。」

別に、俺に言い訳する必要はないのだが…。

コイツは昔から、コミュニケーション能力というものが高かったから、天職とは言えるかも知れないが…。

それに、彼女の容姿は、世間一般の評価では、美人と言えるだろうが…。

「お前の両親は知ってるのか？」

「知らないと思うよ。こっちから言うわけではないし、聞かれもしないし…。っていうか、ほとんど連絡とってないし…。」

「お前、やっぱりまだ…。」

俺が石崎と話すようになったのは、高一の頃。

その時、コイツは父親と二人暮らしだった。

そのあとすぐ、石崎の父親は再婚した。

新しい継母とは、上手くいっていないらしい。

嫌われてるとか、嫌がらせをされているとかではなく、むしろ優しいらしい。

だが、お互いどう接していいかわからず、上手くいかないのだろう。家族間の意志疎通は、コミュニケーション能力云々では、どうにも出来ないこともある。

親の再婚がもっと小さい頃なら、それなりに上手くいくと思われるが、人間、年をとると適応力というのが低くなるのだろう。

俺の家も似たようなものだ。

俺の実母が、『新しいお父さんだよ』と男の人を連れてきた時の違和感は、大人になった今でも、鮮明に覚えている。

その時、俺はまだ小学生だったから、それなりに上手く適応出来た。しかし、本当の父親だと今では思ってるが、心の奥底にある違和感を、完全に拭い去ったとは言い難い。

石崎は、高校を卒業すると、進学のために上京した。

まるで、複雑な家庭環境から逃げるように…。

俺も同じく上京したが、その後、お互い連絡をとっていない。

俺達は、高校時代、仲が良かったと言えば良かったのだが、所詮、その程度の関係なのだろう。

俺達の関係が、石崎が言うところの『親友』とやらだったら、10年も音信不通なわけではない。

単なる同級生やクラスメイトではなかったことは確かだが、言わば、似たような境遇を持つ同士みたいな関係だったのだろう。

「タクちゃん、次の休みいつ？」

帰り際、石崎に聞かれる。

「来週は土、日は休みだと思うけど。」

予定外の出来事がなければ…だが。

「じゃあ、土曜日は空けておきなさいよ！」

「命令するな！」

「そういう態度をとれる立場じゃないでしょ！今回の借りは、きっちり返してもらうからね！覚悟しておきなさいよ！」

「出来れば、お手柔らかに…。」

俺は自分の犯した罪を、どう償えば良いのでしょうか？

何でこうなる？

次の土曜日の朝、目覚まし音の代わりに、ケータイの着信音で起こされた。

『はい：川口です。』

『もしもし、タクちゃん？私！』

俺はまだ、オレオレ詐欺に引っ掛かる歳ではない。

『どちらの、私さん、ですか？』

声の主が、石崎香織であることは分かっているが。

『相変わらずアンタは、自分の立場というものが分かっていないよ  
うだね！』

『ハイハイ、すいませんね、体も態度もでかくて。』

『もー、あつたまきた！今から一時間以内にT駅に来い！さもなく  
ば、命はないと思いなさいよ！』

子供の喧嘩かよ…。

『しょうがないな、ボチボチ行くよ。』

『ボチボチじゃなくて、急いで来なさいよ！遅刻厳禁！繰り返す、  
遅刻厳禁！』



『分かったよ…。』

電話を切ってからおよそ三十分、ボチボチ家を出た。

まあ、何とか間に合うだろう。

T駅の改札を抜けると、石崎はすぐに見つかった。

さすが人気キャバ嬢、人混みの中でも目立つ。

「遅い！」

「一時間以内には来ただろ？」

「アンタには、五分前行動の概念はないの？」

仕事なら当たり前だが、私生活にそんな概念は、俺に必要ない。

彼女は、両手に荷物を抱えている。

結構な量だ。

それを、俺に向かって無言で差し出す。

ハイハイ、持てっでことですね。

「『荷物、持とうか？』って、なんで先に言えないかなあ。これだから、モテない男は…。」

男が女に、口喧嘩でかなうはずがない。

ここは、言いたいことをグツと堪えて、素直に従っておくのが正解である。

荷物の中身は、ブランドバックやブランドアクセサリ、ブランド小物、未使用と思われる靴など。

仕事上の戦利品、ってやつだろうか？

この日、俺達が最初に向かったのは質屋。

荷物の中身を換金するようだ。

そして、可哀想なのは、大量の戦利品の贈り主達。

それとも、贈り主達は、こうなることを承知で貢ぐのだろうか？

垣間見た生活ぶりからは、お金に困っているようには見えなかったが。

それに、人気キャバ嬢ともなれば、俺より稼ぎがいいはずだが。

「こんなに大量に換金して、お金でも必要なのか？」

「まあね…。昨日で仕事辞めちゃったし。」

「はあー？」

「だから、何でアンタがそんなに驚くのよ！それに、今、住んでる所からも引っ越さないといけないから、荷物整理も兼ねて。」

それなら納得だが…。

「何でまた急に？」

人気キャバ嬢から無職に転落ですか？

「最近、色々あって、なんかめんどくさくなっちゃったから…。」

めんどくさくなったら、仕事は辞められるものなんでしょうか？

質屋で大量に換金した後は、近くのカフェに入る。

「勿論、タクちゃんの奢りだからね。」

「ハイハイ、分かってますよ。」

特に高額というわけでもないカフェ代ぐらい、奢ってやるよ。

「これでチャラじゃないからね。」

俺の犯した罪は、どのくらい重いものなのでしょうか？

全く記憶にないことなのに…。

それに、そういうことは、例え記憶がなくても、それなりの感触というものが、残っていてもおかしくないんだが、それが全くないのはどういうわけだ？

それは、そういう行為に憧れを持った、童貞の妄想に過ぎないのか？

俺的には喜ばしいことなのに、何だか釈然としないものを感じる。

イヤ、待て、『喜ばしいこと』というのは、語弊がある。

それじゃあまるで、石崎を友人以上に見てしまっている、ということではないか？

再び、俺の頭は混乱してきた。

「あのさあ…、本当に申し訳ないんだが、この前、タクシーに乗ってから、朝起きるまでの記憶が、全くないんだが…。」

『困った時は、知ってる人に聞け！』

昔、ばあちゃんがそう言ってた。

「アンタの最低っぷりを、一から説明した方がいいの？」

俺は、無言で頷くしかない。

聞くに堪えない話でも、何も分からないよりは、幾分マシ…だろう。

ふんだんに彼女の主観を交えたその話は、予想していたものと少し違っていた。

とても三行では説明出来ないが、要約すると…。

一緒にタクシーに乗り込み、まず、私の家に向かう。

レディファーストだから当然でしょ？

今思えば、これが間違いの元だった、後悔はしている。

タクシーに乗るとすぐに、タクちゃんは眠りに落ちる。

家に着くまでには起きるだろう。

寄り掛かるな、重いから！

私の家に着いても、この男は起きない。

タクシーの運転手に、何とかしろ、お前の彼氏だろ、と勘違いされる。

運転手の奴ふざけんな、お前の車には二度と乗らない。

外に放置しようと思ったが、良心が咎めた。

仕方ないので、自分の家に連れて行く。

マンションの十階まで、180センチオーバーの大男を、か弱い女性が担いでいく羽目になる。

マジ重い、死ね。

部屋に入ると、大男は床に倒れ込んでいびきをかき始める。

素っ裸にしてベランダに放り出そうと思ったが、死なれては困るので止めた。

でも、一遍、死ね。

シワになったらまずいだろうと思い、スーツを脱がせてあげた私の優しさを、褒め称えなさい。

そして、毛布まで貸してあげた私を、神と崇め奉りなさい。

それから、朝起きると、大男の腹を踏んで転ける。

肘と膝に痣が出来た、治療費払え。

ということを、三十分ぐらいかけて説明された。

俺は、所々、命の危険にさらされている。

「それだけ？」

「『それだけ？』じゃねえんだよ、オイ！ふざけんな、コラ！」

だから、ガシガシと脛を蹴るのは止めなさい、痛いから！

それから、女性が男性を、汚い言葉で罵ってはいけません！

「俺は…、やってないの？」

バシッ！

「充分過ぎるほどやらかしてるだろ！」

そう口に出すより先に、頭を叩かれた。

ごもっともでございます…。

「何ていうか…その…、男女間の行動というか、行為というか…ゴニョゴニョ…。」

「何をゴニョゴニョ言ってるの？謝罪の言葉は、はっきり言いなさ

いよ！まだ、許さないけど。」

「誠に、申し訳ございませんでした。以後、気を付けます。」

大袈裟に頭を下げ、許しを請ってみる。

「フン！」

姫様は、ご機嫌を治してくれません。

「今、聞いた以上のことは、俺はしてないの？」

「してないけど？」

「そうか…、良かった…ってえー！」

「少しも良くないだろうが！」

本気で蹴るのは止めて！

涙が出てくるから！

その後、店を出ると、彼女の買い物に付き合わされた。



何かを買うわけでもないが、色々な場所に引っ張り回される。

そして、彼女の家の前に着いた時には、既に、日が落ちていた。

マンションの前で別れを告げ、帰ろうとするが…。

「ちょっと待ちなさいよ！今日は、一日付き合うつて約束でしょ？」

空けとけとは言われたが、一日中付き合えとは言われていない。

彼女の家に向かったから、これで解放されると思った俺は、少し甘かったようだ。

マンションの前で待ってるように言われ、彼女は一旦、自分の家に戻って行った。

そうか…、やってないのか…。

良かったのか、悪かったのか…。

これから、高級ディナーでも奢らされるのかな…？

金、足りるかな？

それなら、俺もこの格好じゃまずくないか？

そんなことを考えながら、待つことおよそ二十分。

「お待たせ！」

彼女は、先程までとは違い、かなりラフな格好に着替えてきていた。

こっちの格好の方が、彼女らしい気もする。

さっきまでの格好は、どこかしら無理しているようにも見える。

コンタクトレンズは外したのか、メガネ姿だった。

そうだよ、コイツ、高校二年の途中までは、メガネだったんだよ！

今より、遥かに地味だったし。

それが、キャバ嬢になるなんて、不思議なもんだ。

「これから、どこ行くの？」

「タクちゃんの家。」

「はあ？」

「外で飲んでもいいけど、タクちゃん、また潰れたら今度は死ぬかも知れないよ。私は二度と助けないから。」

イヤイヤ、ちょっとは助けようよ！

ていうか、潰れるまで飲ますなよ！

何でこうなる？

俺の家の近くで、大量の酒とつまみを買い、結局、彼女は俺の家に押し掛けて来た。

「せまっ！」

第一声がそれですか？

これでも、28歳男性の独り暮らしには、充分過ぎる広さなんです。

一応、ヤバめのものは片付けてあるし、先週の日曜日に掃除もした。少しだけ散らかってる物を片付け、酒類を冷蔵庫にしまっていると。。。

「何してるんだ？」

彼女は、ベッドの下やら、本棚やらを物色している。

「エッチな本とかエッチなビデオとかは、どこにしまっているのか

なと思って。」

コラコラ、何をしているんだね、キミは！

簡単に見つかる場所に、隠すわけがないだろ！

この家に、そういう類いの物が見つかったら困る相手は来ないのだが、長年の習慣からか、きっちり隠してしまう。

隠し場所を工夫しながら、少年は大人になっていくのだよ。

「ねえ、タクちゃん。」

「ああ？」

だいぶ酒が入ってきた頃。

「もしかして…、私とやっちゃったと思ってた？」

「何を？」

「『何を？』って、セックス。」

「ばっ、ばバカなことを…！！！！」

「やっぱり、そう思ってたか…。」

嫁入り前の女性が、口に出していい単語ではないと思いますが…。

「酔っ払って記憶をなくした上に、知らない家で朝目覚めたら…、しかも、その部屋の主が女性だったら…、その可能性ぐらい考えるだろ？」

「童貞の妄想って怖いなあ…。」

「ど、どどど童貞ちゃうわー！」

「見栄張らなくても大丈夫だって。バカにしたりしないから。」

「…。」

「タクちゃん…、私としたい…の？そういうこと…。」

これが罠であることぐらい、俺でも分かる。

さすが元キャバ嬢、と言いたいところだが、上目遣いで俺を見つめ  
ても、ダメですよ。

そんな手には、引っ掛かりませんよ。

「いいえ、全然。」

「あー、何かムカついた、その言い方！タクちゃんは、自分がどれ  
だけ恵まれているか、考えた方がいいと思うよ！」

「どの辺が恵まれているって言うんだよ！」

恋人もおらず、高校時代の同級生の女に、虐げられているというのに。

「私と自宅で酒が飲めるなんて、本来は有り得ないことなんだよ。みんな店に来て、高い金払わないと、私とは一緒に飲めないんだから。」

コイツは、自分を何様だと思ってるんだ、無職のくせに！

そんな奴に逆らえない俺も、どうかしてるぜ…。

「そう言えば、キャバクラって簡単に辞められるものなのか？色々、引き止めとか、しがらみとかがあるんじゃないの？」

「普通はそうだけど、結婚するって言ったら、結構、簡単に辞められた。」

「はあー？お前、結婚するの？」

何か胸の奥底がズキズキしてきた。

「しないよ。」

「はあ？」

全く意味が分かりません！



**お前、何してんの？**

朝、目覚めると、見慣れた天井が視界に入ってきた。

ここは、間違いなく、俺の家である。

だがしかし、俺は毛布こそ被っているが、フローリングの床の上に寝ている。

俺の記憶が確かなら、今日は日曜日。

二週連続で、自分の置かれている状況の確認から、始めなければならぬ。

横を見ると、テーブルの上に、缶ビールの空缶やら、つまみの残りやらが散乱している。

反対側を見ると、ベッドがある。

本来、これは俺が寝る場所なのだが、別の誰かが寝ている。

今回は、寝るまでの記憶はちゃんとある。

そして、俺から寝床を奪った奴に対して、だんだん腹が立ってきた。

二日酔いでガンガンする頭を擦りながら、起き上がり…。



「コラー！起きろー！」

そう言いながら、布団をめくる。

「キャッ！」

「あっ、ゴメン！」

女性の悲鳴に慌てて、布団を戻しながら謝る。

俺の寢床を占有していた奴は、Tシャツとホットパンツを身に付けた女性だった。

昨日…。

俺は、高校時代の同級生である石崎香織の用事に付き合わされる。

先日、彼女に迷惑を掛けてしまったお詫びを兼ねて。

何故か、俺の家で酒を飲む流れになり、今に至る。

「オイ、そろそろ終電の時間だぞ。」

「いーの、いーの。今日は、ここに泊まってくから。」

深夜、俺は彼女に帰宅を促した。

それを断るということは、どういうことを意味するのか分かって  
いるのか？

今日の俺は、まだ酔い潰れていないんだぞ！

「俺は男で、お前は女であることを忘れてないか？」

「タクちゃん、私には何もしないんでしょ？」

ちよつと言葉にトゲがある言い方だ。

「でも、どこで変なスイッチが入るか分かんねえし…。」

男は、突然、狼になる場合があるのですよ。

「タクちゃんのそのスイッチ、壊れてるから大丈夫。」

完全に舐められております…。

「何で俺が、自分の寢床を譲らないといけないんだよ！」

「女性を床に寝かせて、良心は咎めないわけ？」

「ああ、咎めないね！だって、ここは俺の家だし。俺は帰れって言ったのに、帰らなかったお前が悪いわけだし。」

「じゃあ、一緒に寝ようよ！」

「ふ、ふざけんな！そ、そんなこと出来るわけないだろ！」

「冗談なのに、何、マジギレしてんの？これだから、モテない男は！」

「もういいよ、分かったよ！俺が床で寝るよ。」

結局、口では勝てません…。

彼女は、俺を電話で呼び出した時から、ここまです計算していたのだろう。

彼女が自分の家で着替えて来た時、少し大きめのバックに変わっていたが、その中にはお泊まりセットらしきものが入っていたようだ。

結局のところ、俺は彼女の手のひらの上で、踊らされていたに過ぎない。

それにしても、広い家があるのに、わざわざ狭い部屋に泊まらなくても…。

あの家に帰りたくない理由でもあるのだろうか？

「いきなり布団をめくるなんて、ホント最低！エッチ！死ね！」

俺は、感謝こそされ、罵倒される覚えはない…よな？

「悪かったよ…。」

コイツには借りがあるからか、どうにも強気に出れない。

「今日は、何しようか？今日は、タクちゃんの行きたい所に付き合  
ってあげる。」

コーヒーをすすりながら、彼女が言う。

どうやら、機嫌は治ったようだが…。

「何もしねえよ！ていうか、それ飲んだら早く帰れ！」

「ブー！」

膨れっ面してもダメです。

恋人じゃない女に、そんなことされてもウザイだけです。

恋人はいたことないけど…。

あくまで、想像でしかないんだけど…。

それに、コーヒーぐらいは出してあげるが、これ以上、コイツに付き合う義理はない。

借りはもう、充分、返しただろ？

そして、俺もコーヒーに口をつけようとした時、携帯電話が鳴った。

発信元は会社から。

俺の休日が、終了したことを意味していた。

「お前、いつまでいるんだよ！俺はもう行くからな！鍵は郵便受けに入れといてくれればいいから。早く帰れよ！」

「はーい！」

いいお返事だが、どうにも嫌な予感がする。

仕事に、ではなく、彼女にだ。

その目は、女性特有の、何かを企んでいる時の目だ。

俺の母親と妹は、何かを企んでいる時、必ず、こういう目をしていた。

「こんなことで、いちいち呼び出すなよ。俺は、アンタ達と違って休みだったんだよ。アンタ達は別の日に休みがあるけど、俺の休みは戻って来ないんだよ。」

取引先のクレーム処理から帰る道すがら、思わず、愚痴がこぼれる。たいしたトラブルでもなかった為、一旦、会社に戻ることにする。

待機している上司に報告したり、報告書を書いたりする必要がある。

上司への報告は、既に電話で済ませた。

報告書は、明日でもいいんだが。

どうせ家に帰っても暇だし。

夏の一日は長いが、帰る頃にはもう、日が落ちかけていた。

家の前に来て、自分の部屋をふと見上げると、電気がついていた。

アイツ、つけっ放しで帰りやがったな！

郵便受けから鍵を取り出し、ドアを開けると、なんだかい匂いがある。

美味しそうな御飯の匂いだ。

なんだ？

部屋の奥に入って行くと、テーブルに美味しそうな料理が並んでいた。

「あっ、おかえり！」

「ああ…、ただいま…。じゃなくて、お前、何してんの？」

「晩御飯を作ってるところ。もうすぐ出来るから、着替えたら？」

「そうじゃなくて、何でそんなことしてんの？帰ったんじゃないのかよ！」

「家には、一回、帰ったよ。タクちゃんの家って、料理道具とか、調味料とか何もないんだね。私の家から少し持って来たから。心配

しなくても、代金請求とかはしないから安心して。」

「だから、そうじゃなくて！」

「どうせ、外食とかコンビニばっかりなんでしょ？そんな生活していると、メタボになっちゃうよ。高校時代よりも太ったでしょ？」

「だから…。」

お願いだから、俺の話を聞いて下さい…。

「どう？どう？美味しい？」

ご褒美を待つ犬みたいな目をするんじゃないよ…。

「ああ…、美味しい…よ。」

「良かった！私、こう見えても、料理は得意なんだよ。小さい頃からやってたから！」

だったら、その特技を生かしなさいよ！

キャバ嬢なんかやってないで！

あっ、もう辞めたんだっけ。



「絶対、無理だって！」

「これで、この前のことは、許してあげる！忘れてあげるから！」

何か裏があるとは思っていた。

「一ヶ月ぐらいいは、今の所に住めるんだろ？その間に探せよ！」

「一ヶ月も住めないよ。それに、仕事を探す上に、住む所も探したら、一ヶ月なんてあつという間だよ。」

何か企んでいると思っていた。

「だったら、他の奴に頼めよ。大学時代の友達とか。」

「大学時代の友達は、みんな結婚しちゃったし。」

「キャバクラの元同僚は？」

「キャバクラの同僚に頼むなんて出来ないよ。タクちゃんは知らないけど、水商売って裏じゃ酷いものなんだから！嫉妬と欲望が渦巻く…。」

嫌な予感は、的中してしまった。

恋人でもない男女が、一緒に住むなんて、どう考えてもおかしいだろ！

俺が、色々、我慢しないといけないじゃないか！

「お前が置かれている状況は、理解したけど…。」

「ねっ！お願い！家事とかやってあげるから！今日みたいに、温かい御飯が食べられるよ！」

ヤバイヤバイ、元キャバ嬢って半端ねえな…。

つい、『うん』て言いそうになるじゃないか…。

「倫理上、問題があるというか…。」

「そこら辺は大丈夫でしょ。同棲じゃなくて、同居なんだし。それに、タクちゃんは、私とエッチする気はないんでしょ？」

「そうなんだけど…。」

男には、色々、複雑な事情があるわけで…。

「それとも、『体で払え』って言う？それならそれで、構わないけど。」

「言わないよ！言わないけどさあ…。」

頑張れ、負けるな、俺！

優雅な独り暮らしは、終わりを告げるんだぞ！

「…。」

だから、潤んだ瞳で見るのは止めなさい、ウザイだけだから！

あれ？でも、そんなにウザくないかも…。

「期限…。そうだ、期限を決めよう！」

あれ？事実上、同居を許可してしまったんじゃないか？

「期限は、私の新しい仕事と、新しく住む場所が決まるまで。」

話になりません！

どうしてこうなった？

「はぁー……。」

朝、洗面所で、歯ブラシを手にとろうとした時、大きな溜め息が出てしまった。

俺専用の使い込まれた白い歯ブラシの横には、同じく使い込まれた赤い歯ブラシが並んでいる。

どうしてこうなった？

溜め息の原因は、間違いなくアイツの所為だ。

こっちは、これから仕事だというのに、布団の中で、優雅に寝息をたてている石崎香織の所為だ。

石崎香織は、俺の家の居候である。

なし崩し的に、俺の家に転がり込んで来た。

同棲ではなく、同居である。

男女間の営みなどは、勿論ない。

彼女は、仕事と住む場所を探しながら、俺の家の家事などをしてい

る。

住み込みの家政婦みたいな奴だ。

彼女は、強引に同居を決めた翌日から、早速、身の回りの物などを運び込んで来た。

その荷物は、意外なほど少なかった。

女性に必要な身だしなみ道具や着る物、料理道具などだけだった。

電化製品やベッドなどは処分したと言う。

着る物も、いわゆる、キャバ嬢時代の戦闘服的なものは処分したらしく、多くはない。

布団は、新しい物を自分で買ってきた。

おかげで、俺のベッドは、本来、使うべき人物である俺の物となった。

しかし、彼女の荷物が少ないとはいえ、男の独り暮らしの家に、住人が一人増えれば随分と手狭になる。

俺も、必要ないものは、出来るだけ処分した。

エロ本などの、男の必需品は、彼女にあっさり見つかかり、勝手に処分された。

彼女は髪を切った。

茶色く、長かった髪は、肩の上辺りまで切り、色も黒くしてきた。

就職活動中だから当たり前だが。

コンタクトレンズは、金が掛かるからと、普段はメガネで過ごしている。

派手なメイクは控え、必要最低限のメイクでいる彼女は、高校生の頃のイメージに近い。

「これで制服なんか着たら、充分、高校生で通用しちゃうんじゃない?」

髪を切ってきたあと、彼女はそんなことを言っていた。

「それはさすがに、無理があるだろう? シワや肌の張りで、すぐバレル…痛い!」

だから、口より先に手を出す癖は止めなさい!

俺の心は、梅雨空のように晴れない。

まるで、今日の天気のように…。

あれ？何か、今日は寒気がするな。

風邪でも引いたか？

昼頃、俺の体調は、かなり悪化してきた。

寒気どころか、動くのもしんどい。

「タクさん、調子悪そうですね、大丈夫ですか？」

後輩の加賀美由紀に、心配そうに声を掛けられた。

彼女は、経理担当で、俺の三歳下。

清楚で可愛らし娘だ。

誰かさんとは大違いで。

実は、最近、加賀ちゃんとは、ちよっという感じだったりする。

「結構しんどいけど、何とか大丈夫。」

今出来る、最大限の笑顔で応える。

「無理しないで下さいね。」

加賀ちゃんは、優しい笑顔を向けてくれる。

ホント、いい娘だなあ。

「おい、タク！お前、今日はもう帰れ。そんな状態じゃ、仕事にならないだろ。」

昼過ぎ、半ば強制的に上司の命令で帰宅させられた。

特に、急ぎの仕事もないし、早退出来るのは、正直、ありがたい。

しかし、何となく、気が引けるのは、俺が歳をとったからなのだろうか？

病院に寄ってから家に帰ると、俺の家に住み着いている家政婦みたいなお方は、俺の真っ青な顔に驚いていた。

「朝から調子悪かったの？」

「まあ。。。」

「何で言ってくれなかったの？」



言ったところで、お前は何も出来ないだろうが！

それに、俺が家を出る時は、まだ、夢の中だっただろ？

「今日一日ぐらい何とかなると思ったから。明日は休みだし。」

「お粥でも作るから、それまで寝てて！」

促されるまま布団に入り、何気なく彼女を見る。

「…。」

「ん？タクちゃん、何でニヤけてるの？風邪で頭までやられちゃった？」

「ニヤけてねえよ。」

考えていることが、顔に出てしまったようだ。

病気の時に心配してくれる人がいるのは、嬉しいことなんだな…と。

それから、どれくらい時間が経っただろうか？

「タクちゃん！お粥出来たよ。何か食べないと、薬が飲めないですよ？」

石崎の表情は、俺の体調を心配してなのか、真剣そのものだった。

こういう時に、隣にいてくれるのが、恋人や奥さんだったら、もっと嬉しいのかな？

次の日には、熱も下がり、日曜日には、体調はすっかり元通りになった。

「そういえば、私、仕事が決まったよ！」

ようやく、第一段階進んだか。

「どこ？」

「ここの近所のコンビニ。来週から行くことになったから。」

「はい？」

それは、仕事が決まったとは言わないのでは？

だって、バイトだろ？

そんなんじゃ、自立なんて無理だろうが！

「その店長さんと、顔馴染になったから、『私、仕事探してるんです』って言ったら、『履歴書持って来たら、うちで雇ってあげる』って言われたの。一昨日、履歴書持って行ったら、本当に採用になっちゃった！」

「その店長ってどんな人？」

違うだろ、突っ込むところはそこじゃないだろ！

何を言ってるんだ、俺は！

「気さくな、普通のおばちゃんだよ。その人曰く、サービス業は、愛嬌とか愛想っていうのが重要らしいのよ。仕事はそのうち覚えるけど、愛嬌とか愛想は生まれ持ったものが重要だって。」

「面白そうな人だな。」

だから、何を言ってるんだ俺は！

静かな暮らしを取り戻したくはないのか！

「『アンタは愛想もいいし、若くて可愛い娘だから合格』って言われちゃった！」

「お前、そんなに若くないだろ。」

という言葉は、辛うじて飲み込んだ。

危ない危ない、また蹴られるところだったぜ！

「働くにあたって、保証人が必要らしいんだけど。店員が売上金を持ち逃げしたりする場合があるから、念のためらしいのよ。タクちゃん、書類に名前書いてね。」

「俺なんかでいいの？」

「身元がしっかりしてれば、同棲中の彼氏でいいって！」

「俺はお前の彼氏じゃない！それに、同棲じゃなくて同居だ！」

「細かいことはいいじゃん！それに、同棲中の彼氏ってことにしておいた方が、色々、都合がいいの。」

俺は良くない！

何だか、なし崩し的に同居の延長が決まってしまった気もする…。

それも悪くないと思った俺は、まだ、どこかおかしいのだろうか？

そして、月曜日…。

珍しく、イヤ、初めて、俺より早く、彼女が起きていた。

「おはよう！」

何か作っている彼女は、ご機嫌がよろしいようで。

「おはよう。今日からバイトだっけ？結構、早い時間から行くんだな。」

典型的な夜型人間の彼女のことだから、もっと遅い時間からだとかかり思っていた。

「タクちゃんよりは、遅く出てくよ。でも、お弁当を作ろうと思つて、早起してみました！」

「へえー。」

「タクちゃんの分もあるからね！」

「はあ？お、俺の分はいらないよ！」

ヤバイ、俺、顔が真っ赤じゃないか？

「一人分も二人分もたいして変わらないから。どうせ、昼は外食ばかりなんでしょ？お弁当は、健康にも良くて、節約にもなるんだから。」

彼女は、もっと金銭感覚がおかしい奴だと思っていた。

俺は、偏見を持って彼女を見ていたことを、恥じなければいけないかも知れない。

「あつ、タクさん！もう体調はいいんですか？」

お昼休憩の為に、休憩室に行こうとした時、偶然、加賀ちゃんと一緒になった。

「もう大丈夫だよ！」

「今日はお弁当なんですネ。私もそうなので、ご一緒してもいいですか？」

「勿論！」

お弁当最高！

石崎、グッジョブ！

「でも、タクさんって独り暮らしですよネ？自分でお弁当作るんですか？」

「ま、まあね…。」

「凄いですね。私なんか、いい歳して、お母さんに作ってもらって

るんです。朝起きれなくて…。」

そう言っつて顔を赤らめる加賀ちゃん。

その顔は、はっきり言っつて反則である。

そんなことを思いながら、俺は何気なく弁当箱の蓋を開けた…。

「…！」

そして、慌てて閉める。

「あっ！」

加賀ちゃんには、バッチリ見られたようである。

ハート型に切り抜かれた海苔が、御飯の上に乗っていたことを…。

「あの、こ、これはね…。」

「なーんだ、彼女に作ってもらってるじゃないですか。何で自分で作ったなんて言っただんですか？私、彼氏に作ってあげたことないですよ！いい彼女さんですね。」

思いもよらぬ形で、失恋確定である…。

その時、俺の携帯が鳴った。

石崎からのメールだった。

『タクちゃん、もうお弁当食べちゃった？言い忘れてたことがあったんだけど、他の人に見られると恥ずかしいから、お弁当は一人で食べてね、てへっ！』

絶対、確信犯だろ、これ！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4494z/>

---

奇妙な同居

2011年12月19日09時52分発行